

すがの老将、もはや張りつめた我慢も挫け、無限の恨みを吞んで京都をさしてすごすごと引上げて行つた。

宇治はその後再び大阪へは下つて來なかつた。

苦節苦戦の十九年

缺損つゞきの興行難

旗上げ興行の後二年、義太夫節に、はじめて新興淨瑠璃の意義が見え出して來た。即ち貞享三年二月、近松門左衛門は遂に義太夫の爲めに、特に義太夫の長所を發揮せしむべき恰好の作をもたらししたのである。それは『出世景清』と題するものであつた。そも義太夫が近松と相識る仲となつたのは、義太夫が曾つて京の宇治座に在るの時、お互ひに新しい藝術に志すものとして、或は將來を語り、提携の約を結んで置いたものであつたらう、義太夫第一回の旗上げに當然新作を上演す可き筈を、近松は大いに自重して、先づ舊作中の好評ものであつた『世繼曾

我」を興へて置き、二年の後に始めて新作の「出世景清」を提供したのである。さうして今度も、その前途を祝福するの意味をこめて、ことに出世の二字を冠らせてゐる。ところが實はこの出世の二字は義太夫を祝福する意味の他に、更に門左衛門自身をも祝福せねばならぬ、進んだ内容をもつてゐるものなのである。此作の事件と云ひ、人物の性格などに、從來の行き方とは全然ちがつた扱ひを試みてゐる點に於て、甚だしく義太夫の所謂新淨瑠璃にふさはしく密接になつて來てゐる。それはどういふことかといふと、在來は多く物語の形式であつたものが、此作では、よほど劇的な書き方に變化して、筋を生かさうとする努力、おほろげながら、人物の性格なども描き出さうとしてゐる。本來井上流の剛健味を基調としてゐる義太夫の藝風には、秋霜烈日の概ある景清や、熱情貞烈の阿古屋は、もつともふさはしい語り物で、在來の景事節事に示した得意藝以外、こゝに更に筋を生かし人の性情を現はす作品を得られたといふことは、一進境を示すものと云つて差支ない。かうして、新派淨瑠璃界に新しい曙光の見え出して來たについて、さて此新傾向を迎へようとする當時の社會はどんな風だつたか。——殆んどこの傾向と相俟つて、文壇や劇壇にも、異常なる更新氣勢が起つてゐて、大方の社會の風潮を物語つてゐるものゝやうである。

すべては古い殻を脱がうとしてゐた。人生的意義の上に新たな一步を踏み出さうといふ時代が來たのである。

芭蕉が貞徳壇林の俳調に甘んぜずして、古池や、の句に正風の價值を世に詢はんとしたのも、西鶴が好色本に筆を絶つて武家物商人物に移つて行つたのも、坂田藤十郎が、所作狂言の傳統を破つて、寫實の藝風を起して劇界を風靡したのも、等しく此時であつた。

『出世景清』の新作上演に勢ひを得た義太夫は、次で『佐々木大鑑』を語つてゐる。道行の文中、

思ひ川干さぬ袂に行く水の……

胡弓や、さゝらを交せての相の山節が珍重されて、『はしはしすみずみに此道行、稽古せぬものなく、これより義太夫節とて、もてはやしぬ』と操年代記は記してゐる。

なほ續いて近松の新舊作、或ひは作者不詳の狂言など、とり混せて上演し、元祿年間に入つてからの重なる語り物だけでも『天智天皇』『忠臣身替物語』『自然居士』『源氏十二段』『日本西王母』『松風村雨束帶鑑』『多田院開帳』『釋迦如來誕生會』『鎌田兵衛名所盃』『義經追善女舞』『頼朝伊豆日記』『百日曾我』（團扇曾我の改題）『當流小栗判官』『源氏烏帽

子折』『浦嶋年代記』などを同十三年までに數へられる。

義太夫は此間、屢々一座を率ゐて旅の興行に出掛けた。安藝、備中などの中國地方を始め、美濃、尾張、伊勢、近江、紀伊、和泉、讃岐、ことに京都、奈良へは頻繁に足を運んでゐる。

かうして義太夫の技藝は次第に圓熟して、元祿十四年五月、遂に彼れの頭には榮冠が翳された。時しも東山天皇の御宇、勅許によつて、竹本筑後掾藤原博教、と名乗ることになつた。義太夫、五十一歳。

竹本座では、すぐに披露興行の支度にとりかゝつた。作者近松門左衛門はこの祝儀興行の爲めに特に『蟬丸』を書いた。近松が何故に蟬丸を選んだかといふと、蟬丸は俗に音曲道の祖神として、古い傳説によつて祀られる神である、管絃の道に通じ、琵琶の名手であつたところから、平曲の家からはことにあがめられてゐる。その平家琵琶の流れであると稱されてゐる淨瑠璃道の爲めにも云はゞ祖神である。そこで近松はその以前の出世景清などと共に平家に縁のある此蟬丸を採つたわけであつて、その蟬丸の末段に『懷胎十月の由來』を添へたのも、胎兒十ヶ月の經過より、始めて人となるの由來を敘べて、暗に義太夫が、苦行の果て今日官名を受領するに至るまでの行程を物語り、さうして前途を祝福するの意を含めてゐる。

この蟬丸が、市中の評判を高めたことは無論のこと、蟬丸が逢坂山へ道行のくだりがことに喧傳されてゐる。

結ぶの神も偽りや、いつの月日に結びそめ、寝そめし夜半の夢消えて、縁さへ薄きから衣、御痛はしや蟬丸は、何のむくいも浮世の間、御身に添ふるものとは、玄上の琵琶一面、清貫稀世御供にて、しほれ出でさせ給ひける。

筑後が得意の莊重な語りぶり、御痛はしや蟬丸が、と語つた調子が、誰れにも忘れられなかつたものと見えて、當時こんな狂句が誰れからともなく流布されてゐる。

暗かりに御痛はしやが行當り

筑後が官名受領の披露を、多くの最肩客の前でした。その舞臺の光景がどんなであつたかといふと、御下賜の装束を三寶に載せて翠簾の前に飾り、自身は下座に見臺を控へておごそかな態度で勤めた。筑後の考へでは假令御下賜の装束とは云へ、身に着けるは畏れ多しとて、態と三寶にて飾つたのである。

その後、筑後掾と名乗つてからは、ひき續いて「天鼓」「曾我五人兄弟」「大磯虎稚物語」「加古教信七墓廻」「最明寺殿百人上臈」などといふものを上演してゐて、元祿の末年に及ん

てゐる。さうして義太夫が最初からの願望であるところの、自分の創造に成る新興淨瑠璃の意義は次第に世間一般の人々に知れ渡り、その力の籠つた藝と云ひ、古流の淨瑠璃には到底味はへない新味を湛へてゐるところ、或は何々、と優れた點は殆んど聴衆に肯かれるやうになつて來て、やうやく酬はれたやうであるが、その實はまだ義太夫の藝が根本から新しいところへ乗り出してゐたとは云はれない。而かも貞享元年竹本座の旗上げ以來、元祿十六年に至る十九年間、義太夫の評判は追々高くなつてゐながら、竹本座の收支は償つてはゐない、殆ど缺損を續けてゐる。何故にさういふ結果になるかといふと、一見甚だ矛盾したやうであるが、これは今も昔も變らない、藝術的に優れたものが必ずしも、興行價值を高めるものではないといふことである。それならば竹本座の興行の外に、一般の見物を多く惹きつけてゐた興行物が、いつたにどういふ風になつてゐるかといふことを、ちよつと振返つて見る必要がある。

歌舞伎芝居の方では、坂田藤十郎を始めとして、水木辰之助、芳澤あやめ、大和屋甚兵衛、荒木與二兵衛、山下半左衛門、竹嶋幸左衛門、柴崎林左衛門、などといふ名優が、京都と大阪とで始終興行をしてその妙技で見物を惹きつけてゐる。

古淨瑠璃の方も、すでに藝道の上では行きづまりになつて、漸衰の傾向であつたが、それで

も、まだまだ情力的に興行はつゞけてゐて、文彌節で有名な岡本文彌、その外阿波太夫、説教座などといふのが興行をしてゐる。

さうして、此處にもつとも大衆向きとして、低級ではあるが、萬人を惹きつけることの出来る興行物がある。それは伊藤出羽掾のからくり芝居、山本飛驒掾の手妻人形の類が素晴らしい人氣を集めてゐるのである。

歌舞伎や古淨瑠璃はともかく、竹本座にとつてはこれが第一の大敵である。竹本座を永い間缺損に導いたも謂はゞ、かうした大敵があつたからである。それは無論技藝の上のことではなく、興行といふ上の問題で、いつも悩まされつゞけて來たのであつた。一般人の嗜好からいふと、靜かに味はひながら聽いてゐる淨瑠璃本位の竹本座もさることながら、手つとり早く見ただ目に變化があつて、單純な子供の頭にもすぐ解釋のつくやうな、からくり人形の方へ先づ足が向くのは止むを得ないことであつた。そんなわけで、竹本座を除く他の淨瑠璃一座は、早くも興行意識を働かして、己が淨瑠璃の間々へ、萬人の嗜好に向くからくりや手妻人形をとり入れて、一人でも多くの客を引かうと焦慮つてゐるやうな状態である。

ざつと竹本座の周圍がこんな具合だつたから、どうも興行成績が思はしくないのは當然で、

氣の毒ながら、何としても義太夫の方は氣勢があらがない。たいていの者ならば、十九年も續いた不成績でとくに尻尾を卷いて逃げ出してしまふところであるが、義太夫の氣持としてはそんなあやふやなものではない、いつかは萬人の前に己が技藝の深奥を訴へて、どうでもかうでも、その心を惹きつけねば止まないといふ自信がある。この信念が腹の底に据つてゐる以上、最早や彼れは微塵も周囲をふり返つて、心を悩ましてゐるやうな無駄はしない、唯一意専心、技藝の鍛練に心をひそめてゐた。ところがどうも周囲の人達から見ると、氣の毒で見えてゐられない、あれほど苦心をして努力を拂つてゐながら、興行成績があらがないでは所詮は竹本座を續けて行くことが出来まい、どうせ時勢には勝たれないのだから、ひとつ義太夫に注告をしてやらうといふので、此際からくりを混せて遣つて見てはどうかと、恐る恐る彼れの機嫌をはかつて言つたが、果して義太夫は頑として之れに應じなかつた。義太夫はかう云つてゐる。

御厚情は有難いが、私は私の創めた義太夫節なるものを唯一つの生命として、何處までも守り育てゝ行かねばならぬ、今日私の義太夫節がまだ一般の嗜好に投ぜぬといふことは、つまり私の藝がまだ未熟であるからだ、興行ごとの不成績も止むを得ないことと思つてゐる、からくりや手妻人形を混用して、たとひ連日の満員をしたとてそれがなんで嬉しからう、私は

如何なる苦行をしても、義太夫節のみによつて生きて行けばよいのである、たとひ見物が五人十人に減つても、たゞ一筋道に私の藝に精進するばかりである。

なんと驚くべき確信ではないか、これでは當座の注告を試みたぐらゐの者が、ぶつ飛ばされてしまふのもあたりまへだ。

ところが、こゝで義太夫が如何に頑張つても、彼れは資本家ではないかぎり、缺損つゞきで乞食になつてしまつてはなんにもならない、いくら意氣はえらくとも物質方面はさうは行かない。これがどうなつてゐるかといふと、幸ひにも、竹本座旗上げ以來の盟主である竹屋庄兵衛が後ろにガツシリと控へてゐる。庄兵衛とても、もとより限りある資本だから缺損が嬉しい筈はないが、彼れは一旦かうと睨んだかぎり、斷じて義太夫を信頼してゐたのである。確固不拔な義太夫の決心と、必ずや將來大事業を爲し遂げる人物であるといふことは一點疑ひを容れる餘地がない。かう見込んだ上は、彼れも亦如何なる不入り不成績でもビクともするのではない、つた。とは云ふものの、義太夫とて庄兵衛とても人間だ、これが二年や三年のことではない、十九年の永い間、かういふ苦しみに出逢つて撓まぬ筈はない、嗚かし情けない思ひをしたであらうが、然したうとう兜は脱がなかつた。達磨大師は面壁九年の默想をつゞけ、曾我兄弟は不

俱戴天の仇を抱いて十八年、よくも辛抱をしたものだと思はれるが、義太夫の精進とて、それにも劣らぬ難行であつたことはいふまでもなからう。

その頃の消息に通じてゐる西澤一風（當代淨瑠璃界第一の精通家）の著はした『今昔操年代記』はかういふ風に事實を物語つてゐる。

義太夫の語り盛り、日々夜々に音聲實り、節ことばに花を咲かせば、聞く人見る人、この太夫ならではと持てはやしぬ。なれども其頃は歌舞伎芝居當り多く、殊に出羽にはさまざまのからくりなどし、見物諸方にわかれは、さのみ大入大當りといふことなく、しばらくこぶらの見物、なれども耐へにこたへり……………

筑後掾の威勢夜まし日増しの繁榮、藝者のほまれ、四方に輝くといへども、ほつこりとした藏人なく、三八の十八にて合はぬそろばん……………

かういふ風に悲境のドン底に陥ちて、もがき苦しんでゐる義太夫に、もう一つ難儀な出来ごとが起つて來た。まことに弱り目に祟り目、泣き面に蜂である。けれどもこれもどうすることも出来ぬ事實であつた。

一座の花形で古今無比の美音家、男性的な此竹本座の調和の上にはなくてはならぬ竹本采女

が、たうとう退座をしたいと云つて出た、興行上の成績がおもしろくなく、況んや自分の藝に強い自信が出来てゐる采女は、もう一日も辛抱がしておられない、今この時とはかり斷然決意を示した。義太夫とて是れを聞いて多少は苦い顔をしたであらうが、強ひてこれを引き止める勇氣はない。義太夫とてその昔、宇治加賀の一座にあつて、京の見物に非常な人氣を博してゐながら、自己の信念の上から斷然退座をしたことがある。そればかりでなく、加賀掾との對抗興行もつい此間のことだ、さう得手勝手は云はれないわけである。義太夫は采女に退座を許してやつた。許してやつたのはいいが、これが爲に竹本座は一層の悲運に落ちた、内憂外患交々至るで、如何なる鐵石心もかう傷めつけられてはたまらない。

さて窮境のドン底にある竹本座を見捨て、出て行つてしまつた采女は、どうなつたかといふと、これが果して同じ道頓堀の東立慶町の芝居で、道具屋吉左衛門、永嶋重太夫などといふ連中と一座して、素淨瑠璃を始めたが、もとより永續きはしないで、すぐ中止してしまひ、その後もう一度準備を豊富にして、陣容を立て直し、自身も豊竹若太夫といふ名に改めて、櫓幕にも堂々と豊竹座と記して打つて出た。いふまでもなく天京の美聲を以て竹本座の豪音義太夫に對抗挑戦する爲めである。この豊竹座とは今の辨天座のあたりである。

道頓堀の東西には、かうして二つの「操り芝居」の櫓が對立することになったのである。

若太夫は豊竹流の始祖で後に越前少掾を授けられた。大阪南船場の富豪の子、霸氣に富んだ敏慧の人。

義太夫は、天王寺村の百姓の子、純情真摯の人、出身も性格も藝風も全く違つたおもしろい對象ではないか。

「曾根崎心中」の成功

新しい現代劇の試み

義太夫の方も、かういつまでも傷めつけられ、叩きのめされてゐては、實際どうにもかうにもならない。ところが天の救けといはうか神佛の加護か、困りきつた義太夫の頭の上へ一道の光明がサツと耀いた。弘誓の船はその岸まで漕ぎつけられたのである。義太夫の喜び譬ふるにものがない。救ひの神様とはいつたい誰れだ、近松門左衛門その人である。